

郷土資料館だより

Vol.41 No.3
2019.3.20

1階企画展示室「バック・トゥ・ザ・ミシママチ！」開催

●開催期間 平成31年4月27日(土)～平成31年9月1日(日)

1階企画展示室において、江戸時代の宿場資料や三嶋暦、小松宮彰仁親王ゆかりの明治の芸術作品・梅御殿の杉戸絵、郷土が生んだ人形作家・野口三四郎の作品など、当館所蔵の代表的な資料を紹介します。これを見れば三島の歴史や文化が一目瞭然、さぁ一緒にバック・トゥ・ザ・ミシママチ！

●交通の要衝、にぎわいのミシママチ

江戸時代には東海道の宿場町として栄え、明治時代以降も商店が立ち並び、商都としてにぎわいをみせた三島。当時の活気を、宿場資料や看板などでふりかえります。

●明治の美、郷土の芸術

明治時代、風光明媚で閑静な土地であった小浜池周辺は、小松宮彰仁親王の別邸として整備されました。現在も楽寿園として四季折々の美を堪能できるこの地には、明治時代を代表する絵師らによる優れた絵画が残されています。宮家の別邸を彩った名品をごらんください。

豊かな自然を擁する三島は、子供や動物など身近な題材をモチーフに情緒あふれる作品を多く生み出した人形作家・野口三四郎のふるさとでもあります。今なお高い人気を誇る野口三四郎の作品から、人形やスケッチを展示します。



▲梅御殿杉戸絵「藤図」龍雲作



◀野口三四郎作品
左：三四呂人形「ハチ公」
右：水彩画「ひまわりと少女」

そのほか、水都・商都としての三島がわかる資料や、なつかしい生活道具などを展示します。

※写真は展示予定の資料です。展示替えにより出品されない期間があります。詳しくは郷土資料館(055-971-8228)までお問い合わせください。

明治150年 富士・沼津・三島3市博物館共同企画展 幕末・明治の富士・沼津・三島

「近代三島をつくった人々」報告

- 開催期間 前期：平成30年6月23日(土)～9月24日(月祝)、後期：10月13日(土)～1月3日(木)
- 入場者数 26,706人 ●展示資料数 252点(前期144点、後期134点、重複あり)
- 関連事業 講演会3回①「幕末・近代の三島の教育」(桜井祥行氏)、②「伊豆における国会開設署名運動」(高橋廣明氏)、③「館蔵資料から見る幕末・明治の三島」(館学芸員2名)
ふるさと講座1回／郷土教室3回／ギャラリートーク4回

今回の企画展は会期を前期・後期に分け、幅広い分野に関わる多くの資料を展示しました。また、図録の刊行や多数の関連事業などを実施し、充実した企画展となりました。とくに講演会は桜井祥行氏(伊豆の国市文化財保護審議会副会長)、高橋廣明氏(下田市史編さん室)の2名の研究者から地域史に関わる最新の研究成果を含むお話を聞くことができ、たいへん有意義なものとなりました。

やすひさ 安久秋山家文書の寄贈報告 —秋山富南関係資料の発見—

安久の秋山家は、江戸時代の地誌学者で、伊豆国の地誌『豆州志稿』の編者である秋山富南（^{ふなん あきら}章、文蔵、1723～1808）を輩出したことで知られます。平成31年3月、その秋山家より、同家に伝来した近世・近代文書約800点が郷土資料館に寄贈されることとなりました。

【寄贈の経緯とボランティアによるクリーニング・整理作業】

平成27年、秋山家の秋山信治氏より三島市へ、同家の蔵に納められていた文書一式（以下「安久秋山家文書」と表記）を寄贈したいという連絡をいただきました。文書の点数が膨大であり、チリ等の汚れの付着が確認されたため、まずは郷土資料館に寄託していただき、館でおおよそその点数の把握とクリーニング作業を終えたのちに、正式に寄贈していただくこととなりました。



当館では、NPO法人伊豆学研究会の橋本敬之理事長にご指導いただきながら、ボランティアによる整理作業の様子古文書整理ボランティアの皆さんと協働でクリーニングと整理を進めていきました。まず、①文書に付着した汚れをハケで取り除き、②1点ごと封筒に納めて標題をつけ、③おおよその分類項目を設けて文書の内容に従って仕分けていく、という手順で作業を進めました。平成29～30年度を作業期間とし、本年度一応の目処がついたため、平成31年3月20日に寄贈式を執り行い、正式な寄贈手続きを完了する予定です（寄贈式については次号掲載予定）。

【並河誠所と秋山富南】

整理作業を進めていく中で、安久秋山家文書中に、秋山富南編纂の地誌『豆州志稿』との関連が推測される文書群の存在が明らかになりました。

地誌とは、ある一定の地域について、地理・文物・風俗などの諸要素を記した書物のことをいいます。日本における地誌は、中国の地誌を手本として編纂されました。江戸時代になると諸藩や幕府、民間の知識人の手によって盛んに編纂されるようになります。三島宿で「仰止館」という私塾を開いた儒学者並河誠所（^{なみかわせいしよ}永、1668～1738）もその一人で、幕命をうけて畿内5か国の地誌『五畿内志』全61巻を編纂したことで知られており、同書はその後各所で行われた地誌編纂に多大な影響を与えました。

富南は誠所の晩年にこの仰止館で学んだ弟子の一人です。『五畿内志』の完成は享保19年（1734）、誠所が67歳、富南がわずか12歳の時のことで、富南が師の編纂事業を目の当たりにしていたとは考えにくいですが、富南もまた、師の功績を引き継ぐ形で伊豆国志の編纂にその身を投じていきました。

【富南の『豆州志稿』編纂事業—現地調査と情報収集—】



【豆州志稿】
（市指定文化財）

富南は当初、私的に調査・編纂を試みていたようですが、独力で果たすことは難しかったらしく、葦山代官江川英毅を頼り、寛政6年（1794）、幕府から地誌編纂の許可を得ることに成功します。これをうけて英毅から伊豆国内の村々に対し、富南の調査に協力するよう触れが出されました。富南は調査班を編成し、現地調査を始めるとともに、各村に対して生産高や人口・戸数、寺社、古跡等を記した「明細帳」（現在の市勢要覧のようなもの）の作成・提出を依頼して、情報を収集していきました。この現地調査と情報収集の成果は、寛政12年、富南78歳の時に『豆州志稿』全13巻として結実し、現在では江戸時代の伊豆国の研究に不可欠な資料として重要視されています。

【伊豆国の村々の明細帳】

寄贈予定の安久秋山家文書中からは、富南の依頼に応じて提出されたと推測される、小坂村・古奈村（現伊豆の国市）、下田町・田牛村（現下田市）、大川村（現東伊豆町）、岩殿村・加納村（南伊豆町）、宇佐見村（現伊東市）、浜村（現西伊豆町）の明細帳が見つかりました。今後さらに深く調査していくことで、江戸時代の伊豆国や富南の編纂事業について、より一層説明が進むことと期待されます。



三島の歴史とジオポイント 15

— つるはみ 鶴喰の八幡神社 —

鶴喰つるはみと言う地名は「鶴が稲穂を口にくわえて神に捧げる」というめでたい古意を持つそうです。集落は、富士山などから供給された土砂が田方平野に堆積した地層を、浅く広く侵食し流れる湧水河川・御殿川の右岸に立地しています。周辺には弥生時代の遺跡が数多く分布することから、集落の成立時期は弥生時代まで遡ることができそうです。

「鶴喰」の初出は室町時代初期の建武3年(1336)の古文書なので、鎌倉時代にはその名が存在していたと思われます。源頼朝が名付けたとする伝承もあります。

江戸時代初期、寛永8年(1631)の古文書では隣村の青木あおきも鶴喰郷に含まれており、その範囲は広がったようです。江戸末期には中村はつたばたや八反畑村とともに沼津藩領に属していました。

古い集落部の約半分は御殿川の旧河川敷に、半分は原地形面上(侵食されていない高い部分)にあります。

氏神様の八幡神社(字下の田46)はその境目、緩やかに傾斜する斜面上に位置しています。

ご神木は大楠です。三島市内の楠では三嶋大社のご神木の楠に引けを取らない巨木です。私が子供のころ、父親の昔話の中で、「あそこにはものすごく大きな木があって、子供10人で抱えた」と聞きました。数年前のジオツアーで訪れた際に思い出し、参加者にご協力いただき調べたところ、大人6人で抱えることができました。ちなみに、大社の大楠は7人で抱えました。

神社の入り口にある手水鉢は三島溶岩製で昭和8年に二日町在住の方が奉納したものです。

花崗岩製の鳥居(平成2年)の脇にある石燈籠は、明治40年に奉納されています。石材は長岡凝灰岩上部層です。竿にはラミナ(浅海底で堆積した縞模様)が認められることから、産地は同材の江戸時代の石切り場があった伊豆の国市・横根沢よりも沼津市・口野に近い石切り場と推察されます。火袋は頑丈な安山岩で作り直してあります。大正12年の関東地震か昭和5年の北伊豆地震で倒れた際、粉碎して作り直したものでしょう。

境内には石剣を祀る山神社と秋葉神社が合祀されています。祠の左右には中台を省略した角柱状の簡易的な石燈籠が一对奉納されています。

左手の燈籠は明治43年に奉納され「秋葉山」とあります。石材は大井凝灰角礫岩(産地は沼津市・大平)です。大破した傘は石質部分の少ない同質の石材を使用しているようです。

右手の燈籠は明治45年に奉納され「山神社」とあります。石材は左手の燈籠と同質です。

大井凝灰角礫岩を使用した石燈籠は石材の産出した沼津市・大平地区にはありますが、三島市などの周辺地域では非常に珍しいです。

鶴喰の戸数は戦前には12戸程度でしたが、昭和58年に県営住宅が建設され、最近是一般住宅も増え、氏子は100戸を超えています。宅地化が進むと、それに反比例して鎮守の杜が減少します。当神社には大楠以外に榎やモチの大木もあります。ぜひ大切に守っていただきたいものです。



鶴喰八幡神社



境内の山神社と秋葉神社

(郷土資料館運営委員 増島淳)

三嶋大社の古文書を読み解く 6

◆刀剣の銘を読む～截断銘のある刀～

しばらく足利尊氏の古文書を続けましたので、ここで少し気分転換。今回は広い意味での文字史料、刀剣の銘を読んでみましょう。刀剣の握り手となる茎部分には、銘が鑿によって彫り切られています。古い刀剣では刀工の名のみ、という場合が多いのですが、時代が下ると、その刀剣にまつわる様々な情報が刻まれる例が増えます。

写真の刀剣は、江戸時代後期、新々刀期（江戸時代後期）の名手、大慶直胤の作。上段の刀は、天保2年（1831）、弟子を伴い東海道を作刀の旅をした際の作品。「イツ」という刻印とともに、三嶋大明神の神号と、直胤と2名の弟子の名が切られています。神前で作刀し奉納したものでしょうか。下段の刀は長刀を思わず大鋒。片面には直胤の名と花押があり、裏面には文化14年（1817）の年号を含む截断銘が切られています。截断銘は試し切り銘ともいい、刀剣の切れ味を確かめる試し切りをしたことを記したものです。通常の古文書と比べ、少しわかりにくい用語が並びますが、一つひとつを確認していくと意味はわかります。「於武州千住」（武蔵国）（ぶしゅうせんじゅにおいて）と「自截断之」（みづから、これをせつだんす）で千住で試し切りをしたことがわかります。江戸の千住には小塚原刑場があり、処刑された罪人の死体を使って試し切りをしたのでしょう。冒頭の年月日、「文化十四年仲秋（八月）同十二月廿六日」は、八月と十二月に試し切りをした意と、八月に作刀し十二月に試し切りした意のどちらかでしょう。通常、同じ刀剣を再び試す必要はありませんし、直胤は作刀期を明記する事が多いので、八月に作刀した、と解釈しましょう。「尾陽」は尾張の美称、「乾山」は犬山のこと。つまり尾張藩犬山の「士」ということ。次は人名で「伊賀兔毛乗重」。犬山城主成瀬家の家臣で、試刀家（依頼をうけて試し切りをする）として知られる伊賀乗重（伊賀兔毛）という人物。この人物が試し切りをしたわけです。「乳割厂金太々」は乳割・雁金・太々と3つの用語で、試し切りをする際の切断部を指します。江戸時代初期と後期では同じ用語でも部位が異なりますが、この時代ですと、乳割＝胸部、乳房付近、雁金＝乳割のやや上、脇の下付近、太々＝雁金の上で肩胛骨にかかる付近、となります。

こうした試し切りは、江戸時代にはよく行われたようで、やがて切れ味による刀工のランク付けも生まれます。寛政9年（1797）、遠州浜松藩士の柘植方理が著した『懐宝剣尺』に、戦国頃から新刀期（江戸時代前期）の刀工200人以上が業物の作り手としてランキングされたのが始まりです。またその協力者で、江戸幕府の首切り役を委託されていた山田吉睦（首切り浅右衛門）は、後に1000人以上の刀工をランク付けし直しています。また試した刀剣の多くには写真の様に、誰がどの部位を斬った、という情報が刻まれます。現代の私達からすると異様な習慣ですが、刀剣が武器であることを考えると、截断銘は、その刀剣の出来、惹いては刀工の力量を推し量る大切な履歴情報だったといえますし、こうした慣例は、合戦のなくなった江戸時代だからこその文化、と評すこともできるでしょう。

ところで時代が進み幕末を迎えると、開国や倒幕を巡る政情不安のなか、丈夫で斬れる業物への関心は一層高まります。刀工のランキングは現実の問題として意識され、刀工を指定した試しや、業物の作り手への大量発注を行う藩も出てきます。個人でも、新撰組局長の近藤勇が最上ランクの業物虎徹（長曾禰興里）を求めた話や、副長の土方歳三が、やはり業物で知られた和泉守兼定を所持した例はよく知られています。幕末の動乱は、実戦刀への関心を広く呼び覚ますこととなったのです。

（郷土資料館運営委員・三嶋大社宝物館学芸員 奥村徹也）



下段 文化14年作刀

尾陽乾山士伊賀兔毛乗重乳割厂金太々自截断之



文化14年作刀
截断銘部分

文化十四年仲秋同十二月廿六日於武州千住

大岡信を育んだ三島と湧水（2）

－ 南小時代と水の詩 －

◆大岡信が伝える小学校の思い出

大岡信は小学校時代の思い出を、1989年『オール読物』1月号の自身の略歴の中で紹介しています。その中で、「飼ったもの一目白・鶏・鯰^{なまづ}…(後略)」の次に「捕ったもの」として「昆虫さまざま、ハヤ、マルタ、フナなど川の生物、蛭たくさん、川の魚は竹製、ガラス製のモジリを仕掛けて捕るか、釣竿(多くは手製)で釣るかだった。どぶの糸ミミズ、川石の底に付着している通称オイベッサンという小虫や飯つぶなどを餌にした。三島は川の町だったから、藻や水草に情動を刺激されることが多かった。」と水辺での思い出をあげています。

続いて「作ったもの」として「模型飛行機(多種、多数)、凧(大小いろいろ)」を挙げ、「これらの経験により、障子の洗い張りの腕については自信を持つ。」とあり、手先が器用で、飛翔するものが好きだったようです。

三島での水の思い出は後年の水に関わる詩に結実していきます。詩の中で水・湧水を詠んだ部分を紹介します。



「故郷の水へのメッセージ」

(前略)

この地下から奔騰する湧水群は
おのおおの管^{くだ}のパルスで生きてゐる
一切の地上の有機生命体の
むさぼるべき最初の吸い口

(後略)

(『文芸三島』第十二号、一九八八年)

「螢火府」

(前略)

四本の川のひとつが落ち窪む
学校裏のドンドンに、水は落ち、水は去り、
昼間なら
マルタもハヤも野の中央を縦横し、

モジリを仕掛け、オイベッサンを川底にあさる
ドンドンに、きのふの水はもうぬなかった。

(後略)

(初出『文芸三島』第五号(一九八二年)、
後に大岡信詩集『水府―みえないまち』所収、思潮社、一九八四年)

昭和30年代の中郷温水池(矢部健氏撮影)

美しい水辺の景色を詠うというより、水中から生き物や水草や水流を皮膚感覚で捉えて躍動的に詠んでいます。

このドンドン^{ドンドン}は南小から西へ向かって国道1号周辺(現富田町)あたりにあり、源兵衛川の清流が落ち込む水深1メートルくらいの天然のプールでした。富士山の雪解け湧水が清流となり、水温15度ほどの泳ぐには冷たすぎる水中には、マルタやハヤが深い所にいるのが透けて見えたといいます。近隣の悪童たちが夏に泳ぐ場所でした。昭和28年(1953)に中郷温水池が造られ、10年後には国道1号が建設されてドンドンは姿を消します。

大岡信が南国民学校を昭和18年に卒業した年、大岡家は奈良橋(中田町)から、宮町(大宮町2丁目12)へ転居しています。

(郷土資料館学芸員 福田 淑子)

郷土資料館ボランティアの会 活動報告

本年度はボランティアの追加募集を行い、全6回の養成講座を開催して新たに20名の会員を迎えました。計79名が、郷土教室を企画・運営する4つのグループ（楽寿園・伝承あそび・昔まなび・展示ガイド）と、文化庁補助事業「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成（平成28～30年度）を受けて文化財の整理・調査を行う2つのグループ（古文書整理・石造物調査）に分かれ、活躍中です。

（1）ボランティア養成講座

- 期 間 平成30年7月～平成31年2月（全6回）
- 参加者数 延べ161人（新規以外のボランティアも含む）

	開催日	講座名	講師	参加者数
1	7/22	オリエンテーション・郷土資料館を知ろう	郷土資料館職員	21人
2	8/5	ESD（持続可能な開発のための教育）について 一気づきを促す魅力あるプログラムづくり	伊藤 博隆氏（関東地方ESD活動支援センター）	28人
3	9/9	三島の文化財を知ろう	迫田 信行氏（郷土資料館運営協議会委員長・ 市文化財保護審議委員）	25人
4	9/30	江戸時代の三島を知ろう	関 守敏氏（郷土史家）	25人
5	11/4	近世の古文書入門	井坂 武男氏（富士市市民部文化振興課）	26人
6	2/7	他館視察研修（静岡市立登呂博物館・ふじのくに地球環境史ミュージアム）		33人

（2）郷土教室（月1～3回 計22回）

- 楽寿園グループ 三島溶岩について興味を持ってもらうため、コーラや寿司酢といった身近なものを使って噴火実験を行う郷土教室を新たに開催しました。
- 伝承あそびグループ 乳加工業で功績のある地域の偉人花島兵右衛門にちなみ、コンデンスミルクとバター作りに挑戦する郷土教室を新たに開催しました。
- 昔まなびグループ 昨年度より三島ゆうすい会の協力で、洋紙・和紙を漉いてオリジナルカードを作る郷土教室を実施しています。本年度は2回目の開催で、素敵なカードがたくさんできました。
- 展示ガイドグループ 立版古（江戸～明治時代流行のペーパークラフト）を作る郷土教室の素材として、新たに月岡芳年の浮世絵「近世人物誌 江川太郎左衛門」を使った立版古キットを作成しました。



立版古

（3）古文書整理（毎月第2水曜日・隔月第4土曜日 計17回実施）

今年度は、①秋山富南を輩出した安久秋山家の文書の分類・整理と、②贅川他石を輩出した的場贅川家の駿豆電気に関わる文書の整理を行いました。秋山家文書はおおよその整理を終え、贅川家文書については整理の成果を「三島市郷土資料館蔵 的場贅川家文書仮目録(1)」として刊行する予定です。

（4）石造物調査（毎月第2木曜日 計10回実施）

平成28年度から毎月、梅名と安久地区の石造物調査を行っています。今年度は郷土資料館運営委員 増島淳氏の支援を得て、石質調査も実施しました。この調査結果は「三島の石造物1 梅名・安久」として刊行する予定です。

引き続き、大場地区の石造物調査を実施しています。



石造物調査の様子

郷土教室・体験イベントの報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。平成30年10月から平成31年1月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
10月14日(日)	昔のあそび	ブンブンごまづくり、こま・けん玉あそび	62人
10月20日(土)	昔のどうぐ	石臼・鯉節削り・和菓子の木型の体験	47人
11月3日(土祝)	明治のペーパークラフト「立版古」をつくろう	明治時代に流行した立体浮世絵に挑戦	36人
11月17日(土)	コンデンスミルクとバターをつくろう	三島の明治時代にゆかりの深い乳製品づくり体験	15人
11月23日(金祝)	昔のくらし	古い道具を見ながら、昔を思い出してみよう(回想法)	250人
	江戸時代の三島宿	旅人風衣装を着て江戸時代の三島宿を体感	169人
12月8日(土)	わら細工	わらで正月飾りを作ろう	99人
1月19日(土)	リリアン編み	毛糸で干支のイノシシを作ろう	12人



10/14 昔のあそび



11/ 3 立版古



12/ 8 わら細工

小学生の昔のくらし体験学習の報告

郷土資料館では、三島市内と周辺市町の小学校3年生を中心に昔のくらしの体験学習を行っています。石臼に大豆を入れて回し、きな粉を作る体験や、足踏み式ミシンを動かす体験は全員が行います。2階の「三島のくらし」体験学習室では、昔の職人(大工・傘職人・紺屋など)についてのお話や、復元した農家の中でイロリを囲み昔の農家の暮らしについて学習します。(写真下)

体験に訪れる小学校は増えており、30年度は以下のとおりでした。

三島市13校 函南町2校 伊豆の国市2校 沼津市1校 御殿場市1校(計19校)

このほか、6年生が古代体験(1校)、幼稚園には紙芝居の上演(2園)を行いました。



寄贈資料の紹介

平成30年11月から平成31年2月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。(お名前の掲載を希望されない方は、三島市民としてあります)

●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
三島市民	古書(大正昭和期のアサヒグラフ帝展号、国華、家庭雑誌、教科書)	6点
早川 英司氏(三島市)	木製看板(明治 箆筒長持製造所 他)、山本玄峰老子書「大乘十來」	3点
田熊 清彦氏(三島市)	写真(矢部健氏撮影、昭和31年、上神川橋付近、三島傘を干す風景)	1点
三島市立図書館	藤岡武雄氏旧蔵『斎藤茂吉全画集』・『竹の里人選歌』(与謝野晶子蔵書印あり)他	4点

加藤箆筒店看板▶



刊行図書のご案内

三島市の石造物 1 梅名・安久

平成31年3月31日刊行(頒布価格未定)

当館とボランティアによる協働団体「三島地域資料研究会」が平成28年度より行ってきた市内の石造物調査の結果をまとめた目録です。全点写真・イラスト入り、石材・銘文なども掲載しており、長年地元の皆様に守られてきた地域の宝を後世に伝える貴重な情報がつまっています。梅名・安久地域の散策などに役に立つ資料です。

三島宿関係史料集 10 (三島問屋場・町役場文書)

平成31年3月31日刊行(頒布価格未定)

幕末に行われた14代将軍家茂の上洛は3代家光以来約230年ぶりの椿事であり、多くの幕府役人・宿場関係者がその準備に奔走しました。今回の史料集では三島宿に残された御上洛関係の資料を翻刻し、宿場に課せられた準備の様子などが確認できる一冊となりました。交通史研究、地域史研究などにご活用ください。

三島市郷土資料館研究報告 11

平成31年3月31日刊行予定(頒布価格未定)

毎年恒例の研究報告もおかげ様で11号を数えるまでになりました。今年も近世、近代の三島の歴史に加え、三島市民が大いに関心を寄せる「小浜池の湧水」についての考察が掲載されております。地域の歴史・文化・自然を深く知るための一冊です。

【内容】

徴兵制から戦捷記念館設立へ—明治初期における地方の軍事化—
近世箱根八里の施行所(接待茶屋)について
三島の酪農・乳加工業—花島兵右衛門の事績を中心に—
「ジオツアー三島宿」の成果(7)—小浜池の湧水—

桜井 祥行
平林 研治
笹山 曜子
増島 淳

郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

開館時間 午前9時～午後5時(4月～10月)
午前9時～午後4時30分(11月～3月)

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、
年末年始

入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
300円。15歳未満は無料、学生は学生証
提示にて無料。)



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.41 No.3(第123号)

発行日 平成31年3月20日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

